

# 教職員の積極的な対話による 相談しやすい関係づくりに向けて

— 1人1台端末を活用した絵文字による健康観察を通して —

令和7年度 神奈川県立総合教育センター  
長期研究員 柏原 絵里子(横須賀市立久里浜中学校)

## 【研究の概要】

保健室に来室する生徒の中には、頭痛や腹痛などの要因を伝えられない、様々な課題や困りごと、不安や悩みがあっても表現や相談ができない生徒がいる。養護教諭として、そのような生徒と丁寧に関わる中で、積極的に対話を重ねていくことの重要性を感じた。そこで、本研究では、1人1台端末を活用した絵文字による健康観察が、教職員と生徒の対話のきっかけや教職員同士の生徒理解に向けた対話の手掛かりとなり、その積み重ねは生徒が相談しやすい関係づくりにつながると考え、検証実践をした。生徒の心身の変化を早期に発見するためのICTの活用や人によって解釈の異なる曖昧な絵文字を利用した毎日の健康観察は、教職員と生徒が対話をするきっかけとなった。また、教職員同士においても生徒についての多面的な情報の共有が対話の機会を増やし、生徒の理解につながった。このように、教職員と生徒、教職員同士の対話の積み重ねが、生徒の安心や信頼につながり、相談しやすい関係づくりに向けて一定の成果があった。

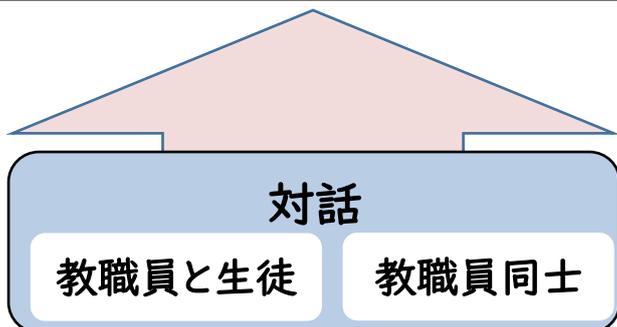
# 研究構想図

## 研究主題

教職員の積極的な対話による相談しやすい関係づくりに向けて  
～1人1台端末を活用した絵文字による健康観察を通して～

### 研究仮説

1人1台端末を活用した絵文字による健康観察は、教職員と生徒の対話を増やすきっかけや教職員同士の生徒理解に向けた対話の手掛かりとなり、その積み重ねは生徒が相談しやすい関係づくりにつながるであろう。



© 2020 Microsoft Corporation. All Rights Reserved.



## 毎日の健康観察

### ICTを活用

- ・ 心と体調の変化を早期に発見
- ・ 生徒の心と身体の状態をすべての教職員と共有
  - ↳ 教職員同士の対話



### 絵文字

- ・ 生徒の感情表出のしやすさ
- ・ 人によって解釈が異なる曖昧さ
  - ↳ 教職員と生徒の対話

### 生徒指導提要

自分の現状を適切に表現出来ない児童生徒もいる中、教職員の「丁寧な関わりと観察」により、児童生徒の心身の変化を把握することを求めている。

### かながわ子どもサポートドック

年に2回以上の生徒へのアンケートから、表面化しにくくなっている課題や困難を抱えている児童・生徒を早期に把握し適切な支援につなぐために、これまでの「待ち」の姿勢からプッシュ型(積極的)な関わり必要性を述べている。

### 生徒の実態

困りごとや不安がある時に、学校にいる大人に相談できていない生徒がいる

### 保健室の実態

保健室に来室した生徒との関わりから、自分の体調不良やその要因などを伝えることが苦手な生徒がいるが、対話を重ねることで、気持ちの表出につながる生徒もいる

## はじめに

近年、生徒が抱える課題が複雑化・多様化している中で、困りごとや不安なことがあっても自分が抱えている状況を「言えない」「言わない」生徒がいる。私たち教職員は、このような生徒に対してどのように関われば、早期に生徒の困りや不安に気づき支援を行うことができるのかを日々模索している。

『生徒指導提要』では、危機的な状況に置かれていても、その状況を適切に表現出来ない児童生徒も少なくない。したがって、児童生徒が危機のサインを表出するのを待つだけではなく、教職員が積極的に危機のサインに気付こうとする姿勢を持つことが大切であると明記されており、具体的には、「丁寧な関わりと観察」を通じて、児童生徒の心身の変化を的確に把握するように努めると示されている(文部科学省 2022)。児童・生徒の心身の変化を把握することについては、「子どもの心身の健康を守り、安全・安心を確保するために学校全体としての取組を進めるための方策について(答申)」に、「健康観察は、学級担任、養護教諭などが子どもの体調不良や欠席・遅刻などの日常的な心身の健康状態を把握することにより、感染症や心の健康課題などの心身の変化について早期発見・早期対応を図るために行われるもの」と記されており、教職員が行う健康観察は、児童・生徒の心身の変化を早期発見するために重要な観察だと言える(中央教育審議会 2008)。

さらに、「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策 COCLOプラン」では、全国の不登校児童・生徒の数が 30 万人を超え、90 日以上の不登校にもかかわらず、学校内外の専門機関等で相談や指導を受けていない小・中学生が 4.6 万人に上っていることを課題としている(文部科学省 2023 p. 1)。そこで、国では、子供たちの心身の状態の変化への気づきや相談支援のきっかけづくりを増やすため、毎日の健康観察に ICT を活用することを推進している(文部科学省 2023 p. 7)。また、「子どもサポートハンドブック～すべての子どもたちの笑顔のために～」(以下「子どもサポートハンドブック」とする)においても、公立小・中学校における不登校の児童・生徒数は年々増加しており、その中で約 36% の児童・生徒が学校内外での相談や指導等を受けていないことを課題としている。そこで、神奈川県では、表面化しにくい児童・生徒の課題や困難を早期に発見していくために、年に 2 回以上のアンケートを行っている。そこから、児童・生徒を適切な支援につなぐために、「待ち」の姿勢ではなく、教職員やスクールカウンセラー(以下 SC とする)・スクールソーシャルワーカー(以下 SSW とする)などの専門家による積極的な面談等を行う取組として「かながわ子どもサポートドック」を実施している(神

奈川県教育委員会 2023 pp. 1-17)。

自ら相談できない生徒の現状は、次の調査からも見えてきた。「令和 6 年度 全国学力・学習状況調査(生徒質問調査)」では、「困りごとや不安があるときに、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」という質問に対して、「当てはまる」「どちらかといえ、当てはまる」の肯定的な回答は、全国 67.5%、神奈川県 66.7% であった(国立教育政策研究所 2024)。所属校では、肯定的な回答が神奈川県よりも低く、困りごとや不安を先生や学校にいる大人にいつでも相談できている生徒が、全国や神奈川県の生徒に比べて少ないことが分かった。所属校の保健室では、頭痛や腹痛などの主訴で来室した生徒に対し、バイタルサイン等の確認だけに留まらず対話を通して、食事や睡眠などの生活習慣や家庭での様子を知ることができた。このように、自分の状況を伝えることが苦手な生徒や困りごとや不安を抱えていた生徒が、対話を重ねることで関係性ができ、少しずつ自分の心身の状態について話し始めた様子から、教職員と生徒との対話の重要性が見えてきた。

以上のことから、表面化しにくい生徒からの SOS を待つのではなく、教職員が ICT を活用した健康観察から積極的な対話を行う手立てを構築することにより、教職員の生徒理解や関わり方の変容を中心に、生徒が相談しやすい関係づくりを目指した研究を進めていく。

## 研究の目的

本研究の目的は、生徒が相談しやすい関係づくりに向け、教職員からの対話を増やすきっかけとして、1 人 1 台端末を活用した絵文字による健康観察が有効であることを明らかにする。

## 研究の内容

### 1 「相談しやすい関係」とは

「支援を必要とする児童・生徒の教育のために」では、さまざまな相談活動において、子どもと教職員との信頼関係があることが大事だと述べられている(神奈川県立総合教育センター 2020)。また、「教育相談コーディネーターハンドブック」において、教職員同士が子どもの状況や支援方法を情報共有し理解しておくことは、子どもの安心につながると記している(神奈川県立総合教育センター 2023)。

これらのことを踏まえ、本研究では、「相談する相手に対して、安心や信頼がある状態」を「相談しやすい関係」と定義した。

## 2 事前調査

### (1) 所属校実態調査(生徒)

#### ア 調査の概要

全国学力・学習状況調査質問調査の結果から、所属校の生徒が、困りごとや不安があるときに、先生や学校にいる大人に相談できない理由を明らかにするための調査を学校長による「健康と学校生活に関する意識調査」と共に実施した(表1)。

表1 所属校生徒への事前調査(アンケート)

対象	横須賀市立久里浜中学校 生徒(460名)
時期	令和7年 6月下旬から7月上旬
方法	Google フォーム
目的	健康と学校生活に関する意識調査

#### イ 調査の結果

問1「困りごとや分からないこと、不安があるときに、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」の質問では、【あてはまる・どちらかと言えばあてはまる】の回答が72%であった。一方、【あてはまらない・どちらかと言えばあてはまらない】の回答が28%であった。

問1で【あてはまる・どちらかと言えばあてはまる】と回答した生徒は、問2「困りごとや分からないこと、不安があるときに、先生や学校にいる大人の誰に相談できますか」という質問では、担任の先生を始め、教科担当や部活動顧問など、学校生活の中で関わることの多い教職員に相談していることが分かった(図1)。

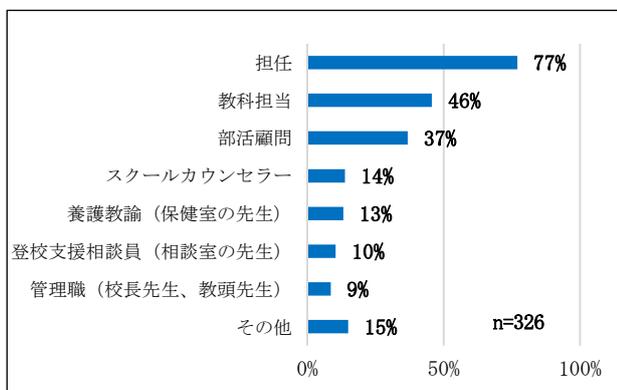


図1 困りごとや分からないこと、不安があるときに、先生や学校にいる大人の誰に相談できますか (複数回答可)

問1で【あてはまらない・どちらかと言えばあてはまらない】と回答した生徒には、問3「あなたが、先生や学校にいる大人に相談できない理由を、答えられれば書いてください」とし、自由記述で回答を得た。生徒の記述には、「話すことが苦手」「大人が苦手」「どうやって話をしたらいいか分からない」「迷惑をかけたくない」「話す時間がなさそう」「いつも忙しそう」「話しかけにくい」「まだ相談できる関係ではない」等があった。

### (2) 所属校実態調査(教職員)

#### ア 調査の概要

所属校教職員を対象に学校長と協同し、事前調査としてアンケートを実施した(表2)。

表2 所属校教職員への事前調査(アンケート)

対象	横須賀市立久里浜中学校 教職員(24名)
時期	令和7年 6月下旬から7月中旬
方法	Google フォーム
目的	生徒の理解等の意識調査

#### イ 調査の結果

「生徒は、困りごとや不安があるときに相談に来ますか」の質問では、【あてはまる・どちらかと言えばあてはまる】の回答が87%であった。一方、【あてはまらない・どちらかと言えばあてはまらない】の回答が13%であった。また、「健康観察の結果をどのように活用していますか」の質問では、多くの教職員が生徒理解のために活用しており、次に個々・集団の健康課題の把握に活用していた(図2)。

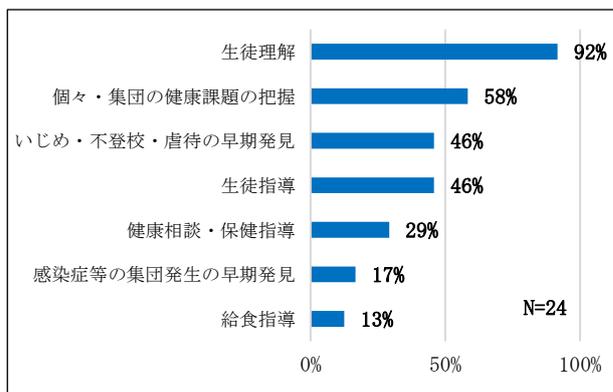


図2 健康観察の結果をどのように活用していますか (複数回答可)

#### (3) 調査に対する考察

教職員は、健康観察の結果を感染症等の集団発生の早期発見や健康相談・保健指導に活用するよりも日々の生徒理解のために活用していることが分かった。また、「生徒は、困りごとや不安があるときに相談に来ますか」において、肯定的な回答が多かったのは、日頃から生徒の様々な相談対応を行っているからだと考えられる。しかし、生徒の事前調査では、30%近い生徒が先生や学校にいる大人に相談できない状況がある。その中で、「迷惑をかけたくない」「いつも忙しそう」「話しかけにくい」「まだ相談できる関係ではない」などと感じている生徒の安心や信頼を高め、相談しやすい関係性を築くためには、教職員からの積極的な関わりが必要であると考えられる。さらに、「話すことが苦手」「どうやって話をしたらいいか分からない」など、自己表現が苦手な生徒の心身の変化を教職員が早期に気付くためには、生徒が自分の感情を表現しやすい手立てについて検討をしていく必要があると考える。

### 3 課題解決に向けての手立てについて

#### (1) 対話について

「子どもサポートハンドブック」では、かながわ子どもサポートドックの取組の内容について、これまで教職員の個人的な判断や、主観的にもなりがちだった「気づき」を、SCやSSW、養護教諭等の多様な視点を取り入れ、すべての児童・生徒の状況を確認することで、児童・生徒が抱える困難を洗い出し、支援の方向性を共有することができると記されている(神奈川県教育委員会 2023 p. 4)。生徒について、多面的な視点を取り入れるためには、これまで以上に教職員同士が迅速な情報共有を積極的に行うことが重要である。さらに、「生徒の自己理解を促す 共感的な対話」では、生徒との対話を継続的に積み重ねることで、教職員の生徒理解が深まり、生徒との信頼関係が築かれる。また、「気にかけているよ」「見ているよ」というメッセージにもなり、「この先生は自分の話を聞いてくれる。わかってくれる」と思うことから、「この先生と話をしてみよう」という気持ちが生徒に生まれると述べられている(神奈川県立総合教育センター 2013)。生徒が安心して話をする関係を作るためには、教職員からの積極的な対話やその積み重ねが必要だと言える。

#### (2) ICTを活用した健康観察について

岩田(2023)は、「タブレット端末を活用して朝の健康状態を把握することは、児童の朝の健康状態を全職員で容易に把握するほか、対面の良さである子どもとのコミュニケーションの機会も増やすことができる可能性がうかがえた。」と述べている。また、五十嵐(2025)は、心の健康観察は、タブレット端末と対面式教育相談のそれぞれの良さを生かすことで、より子どもの小さなSOSを支援につなげていける可能性を述べている。このことから、1人1台端末を活用した健康観察は、毎日行うことで、教職員が児童・生徒の心身の変化を早期に発見することやコミュニケーションの機会を増やす可能性があることから、教職員が生徒へ積極的に関わるための手立てになると考える。

#### (3) 絵文字について

稲葉ら(2006)は、「絵文字メッセージは、『言葉』の壁を越えたコミュニケーションを促進させる」と記している。さらに、Clarkら(1986)は、曖昧さや不確実なものを解消するために、やりとりが反復的に行われるため、コミュニケーションが増加すると述べている。このことから、本研究では、人によって解釈が異なる絵文字を活用することで、教職員がその絵文字を選んだ理由を聞いたり、生徒の日々の絵文字の変化や実際の姿とのギャップに気付いたり、曖昧さを解消するための対話が自然と増えると考えられる。さらに、言葉で表現することが苦手な生徒が自分の気持ちを表現しやすくなることも考える。

以上の3つの手立てから、生徒が相談しやすい関係づくりに向け、教職員が対話を増やすきっかけとなるように、絵文字を取り入れた健康観察を生徒が1人1台端末を活用し、毎日実施することとした。

### 4 研究の仮説

本研究における仮説は次のとおりである。

1人1台端末を活用した絵文字による健康観察は、教職員と生徒の対話を増やすきっかけや教職員同士の生徒理解に向けた対話の手掛かりとなり、その積み重ねは生徒が相談しやすい関係づくりにつながるであろう。

### 5 検証の視点

仮説に基づいて、次の検証の視点を設定した。

- (1) 絵文字を使った健康観察は、教職員と生徒が対話をするきっかけになったか。
- (2) 対話が増えることで、教職員が生徒を理解し相談しやすい関係づくりにつながったか。

### 6 検証について

検証実践に先立ち、生徒と教職員の事前調査を基に所属校の現状と課題の情報共有や生徒とのより良い関係づくりに向けて、教職員対象の校内研修を行った。

#### (1) 校内研修

##### ア 生徒支援・指導研修の概要

【日時】令和7年8月26日(火)

【対象】横須賀市立久里浜中学校 教職員(26名)

【目的】①生徒支援・指導の目的を確認する

②生徒支援・指導に必要な知識を習得し、対応力を身に付ける

【内容】①生徒指導提要の確認

②本研究の具体的な取組について

③発達特性を自分事に捉える

生徒との対話法について

【担当者】①生徒指導担当

②柏原 絵里子(筆者)

③SC

##### イ 研修計画

生徒支援グループの生徒指導担当と、所属校の実態と課題を共有し、生徒指導提要を基に生徒理解に向けた教職員への研修を組み立てた(表3)。筆者からは、生徒と教職員のアンケート結果を比較しながら、所属校の現状と課題について教職員と共通認識を図った。そして、その課題の解決に向けてSCからは、生徒理解やより良い生徒との関係づくりのために、日常の会話時や面談時に実践できる対話法等について、事例を踏まえながら演習を行った。

表3 校内研修実施計画

担当	具体的な内容
①	生徒指導提要の確認 ・生徒指導の定義 ・生徒指導の目的 ・生徒支援・指導の基礎、実践
②	本研究の具体的な取組について ・事前調査の結果について ・所属校の課題について ・日常の健康観察の定義・機会・視点 ・検証実践に向けての説明
③	発達特性を自分事に捉える ・発達特性について考える(ワークシート) 生徒との対話法について ・心に余裕をもつこと ・環境を配慮すること ・ロジャーズの3条件(無条件な肯定的な関心、共感的理解、自己一致)について ・事例を踏まえたロールプレイ実践、演習

ウ 校内研修の評価

校内研修に参加した教職員に対し、研修の振り返りを実施した。「心の余裕を持つことの大切さを感じた」「相手のことを知りたいという思いを届け続け、生徒との信頼関係を守っていきたい」「相手を知ること、共感することから生徒理解につながる」「教職員も生徒も一人ひとり異なった考えを持っている。違った良さや課題を受け入れられる集団を作りたい」「生徒の抱える背景等を引き出せるようになりたい」「雑談から生徒を知ること大切」「人を知ることが、今後の自分の課題だ」など、所属校の現状や課題の共通認識、課題解決に向けての前向きな振り返りを得ることができた。

(2) 検証準備

ア Google フォームで健康観察の作成

「こころとからだの健康観察」～今日の気持ちを「かお」で表そう～

学籍番号の4桁と名前をカタカナで入力し、最後に今日の気持ちに一番近い絵文字等の一つ選ぶ形式で作成した。生徒と教職員の負担軽減のため、短時間で入力や確認ができるように質問項目を三つとした。

イ 絵文字の決定

生徒が自分の気持ちを表現するための絵文字をSCと選定した。絵文字は、人によって解釈が異なるため、喜怒哀楽を表すような表情のものと感情の起伏が少ないと思われる表情のものに加え、対話につながるような解釈の幅が広がる表情のものを選んだ。また、今の自分の気持ちを絵文字ではなく、直接言葉で伝えたいと思ったときに活用できるように「話したいことがある」を選択肢に入れた。

表4 自分の気持ちを表現するための絵文字

① 	② 	③ 
④ 	⑤ 	⑥ 
⑦ 	⑧ 	⑨ 
⑩ 	⑪ 	⑫ 
⑬ 	⑭ 話したいことがある	

© 2020 Microsoft Corporation. All Rights Reserved.

(3) 検証実践

【期間】令和7年9月9日(火)～10月31日(金)

【場所】横須賀市立久里浜中学校

【対象】全校生徒 19クラス(573人)

【内容】Google フォームを使った健康観察

【表題】「こころとからだの健康観察」

～今日の気持ちを「かお」で表そう～

ア 教職員への説明

検証を実施するに当たって、教職員に事前に理解してもらいたい内容を伝えた(表5)。

表5 検証実践事前説明内容

- ①「こころとからだの健康観察」として、生徒が毎日1人1台端末を活用した健康観察を行い、自分の気持ちを絵文字で表現します
- ②絵文字は、言葉で表現することが苦手な生徒が、絵文字を使うことで自分の状態を表現することができます
- ③生徒の日常の心身の状況や変化を把握するために使ってください
- ④生徒が入力した結果を参考に生徒の様子を見てください(Google スプレッドシートの格納場所の提示)
- ⑤入力したくない生徒もいることを想定し、これも一つのサインであると思ってください
- ⑥生徒の特性によっては、様々な教職員に声をかけられることを苦手とする生徒もいるので、教職員同士で相談をしてから声をかけましょう
- ⑦ICTを活用した健康観察の結果だけでなく、今まで通り、先生方の視点で健康観察を行いましょう
- ⑧「話したいことがある」を選んだ生徒へは、二日以内に対応をします

## イ 生徒への説明

検証を実施するに当たって、教職員から生徒へ健康観察の流れや方法を伝える内容(表6)を提示した。

表6 教職員から生徒への説明事項

①	こころとからだの様子を見るために絵文字を使った健康観察を行います
②	Google フォームを使って行います
③	登校したら、Chromebookを立ち上げます
④	Google Classroomの「〇年保健室」に貼り付けたリンクから回答します
⑤	毎日行います
⑥	体調が悪い時は、今まで通り、直接先生に相談をしてください
⑦	先生方は、みなさんの健康を気にかけていますので、Google フォームの回答結果は担任の先生以外の先生も見ていきます
⑧	絵文字は人それぞれ感じ方が違うので、自分の感じた(思った)絵文字を選びます

## 7 事後調査

### (1) 所属校調査の概要(生徒)

自分の気持ちを絵文字で表現する健康観察の検証実践後の生徒の状況を知るために、学校長による「健康と学校生活に関する意識調査」と共に実施した(表7)。

表7 所属校生徒への事後調査(アンケート)

対象	横須賀市立久里浜中学校 生徒(409名)
時期	令和7年 10月下旬
方法	Google フォーム
目的	健康と学校生活に関する意識調査

### (2) 所属校調査の概要(教職員)

自分の気持ちを絵文字で表現する健康観察の検証実践後の教職員の意識調査を学校長と協同し、事後調査としてアンケートを実施した(表8)。

表8 所属校教職員への事後調査(アンケート)

対象	横須賀市立久里浜中学校 教職員(22名)
時期	令和7年 10月下旬
方法	Google フォーム
目的	検証実践後の生徒の理解等の意識調査

### (3) 検証実践後のインタビューの概要

自分の気持ちを絵文字で表現する健康観察の検証実践後の調査として、生徒や教職員への具体的な関わり方や生徒の理解についてのインタビューを実施した(表9)。

表9 所属校教職員への事後調査(インタビュー)

対象	横須賀市立久里浜中学校 教職員(6名)
時期	令和7年 10月下旬から11月上旬
方法	対面
目的	検証実践後の生徒の理解等の意識調査

## 8 検証結果と考察

(1) 絵文字を使った健康観察は、教職員と生徒が対話をするきっかけになったか。

### ア 教職員への事後調査から

「絵文字を使った健康観察を活用しましたか」の質問では、肯定的な回答が91%となった(図3)。

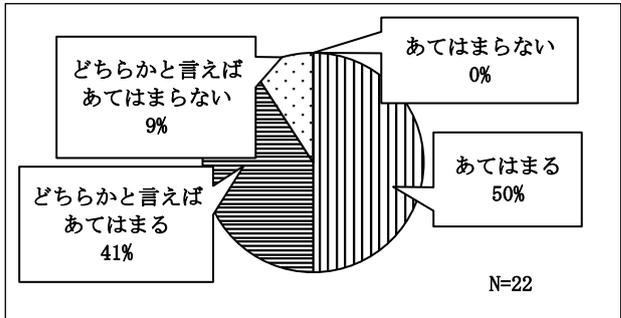


図3 絵文字を使った健康観察を活用しましたか

「絵文字を使った健康観察は、生徒と対話をするきっかけになりましたか」の質問では、肯定的な回答が82%となった(図4)。

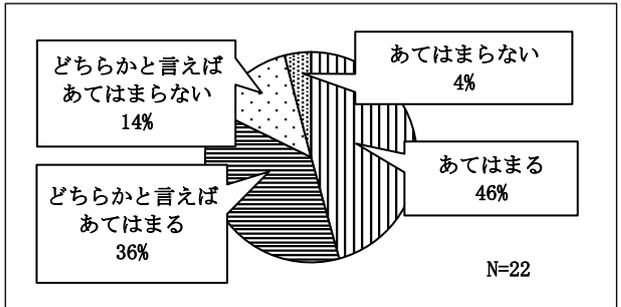


図4 絵文字を使った健康観察は、生徒と対話をするきっかけになりましたか

図3の「絵文字を使った健康観察を活用しましたか」の質問で、肯定的な回答をした教職員に「どのように活用をしたか」について自由記述で回答を得た。その記述内容と教職員へのインタビュー内容を生徒との対話について(表10)に集約した。

表10 生徒との対話について

- ・元気がない絵文字を選んでいる生徒に話しかけることで、日々感じているもやもやしていることや心配なことを聞ききっかけになった。
- ・なぜその絵文字を選んだのかが気になり、話を聞いた。
- ・授業の合間の時間に絵文字を確認し、元気がない絵文字を選んだ生徒やいつも同じ絵文字を選んでいる生徒に声をかけた。
- ・いつも「ここにこの絵文字」を選ぶ生徒が、違う絵文字を選んだときに話かけた。
- ・気になる絵文字を選択した生徒に「どうしたの?」「何かあったの?」と問いかける事で、生徒の抱えている思いや困っている事を把握できるように努めた。

- ・絵文字は、いろいろな捉え方ができるから、生徒と話をするきっかけになった。
- ・普段、話さない内容を話すことができた。
- ・自己主張が少ない生徒と話をすることができた。
- ・学校を休んでいる生徒へ絵文字を使った健康観察の話を伝えることができた。
- ・担任と生徒との関係を大切にするため、担任ではない自分が前面に出ることを控え、生徒と直接やり取りする場面は少なかった。

(原文の意味を変えない範囲で改編)

## イ 生徒への事後調査から

「こころの健康について、先生に直接話して伝えるよりもGoogle フォームを使った方が伝えやすいですか」「からだの健康について、先生に直接話して伝えるよりもGoogle フォームを使った方が伝えやすいですか」の二つの質問では、両方とも【あてはまる・どちらかと言えばあてはまる】の肯定的な回答が80%を超えた。また、「自分の気持ちを絵文字で表す健康観察は、自分の気持ちを先生に伝えやすいですか」の質問では、肯定的な回答が78%であった(図5)。

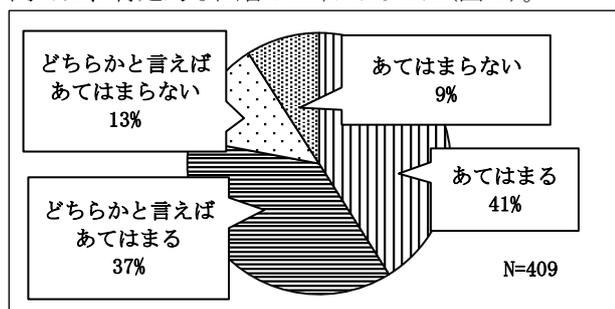


図5 自分の気持ちを絵文字で表す健康観察は、自分の気持ちを先生に伝えやすいですか

以上のことにより、図4の「絵文字を使った健康観察は、生徒と対話をするきっかけになりましたか」の質問において、否定的な回答を選択した理由の中には、表10の下線のように、自分が生徒と直接話をするよりも担任と生徒との関係性を優先した結果、生徒と対話をする場面が少なかった教職員もいたのではないかと考える。また、表10の内容から、多くの教職員が人によって解釈が異なる曖昧な絵文字からその意味を考えると、「なぜ」「どうして」など疑問に感じたり、いつもと違う絵文字を選んだ生徒の変化に気付いたりすることが、教職員から生徒への積極的な対話に結びついたと考えられる。

生徒の事後調査では、「こころの健康」や「からだの健康」のそれぞれについて、「先生に直接話して伝えるよりもGoogle フォームを使った方が伝えやすいですか」という質問に対し、肯定的な回答が80%を超えていた。これは、話に行くタイミングやどうやって話をしたら良いか分からない、周りに知られたくない生徒にとっては、1人1台端末の活用は自分のこころ

やからだについて、安心して教職員に伝えることができる手段となったと考える。また、図5の「自分の気持ちを絵文字で表す健康観察は、自分の気持ちを先生に伝えやすいですか」では、ICTの活用に加え、絵文字を選択するだけで自分の気持ちが表現できる手軽さも生徒の発信のしやすさにつながった。そして、生徒の発信した絵文字の曖昧さが教職員から声をかけるきっかけになったと考える。

このことから、1人1台端末を活用した絵文字による健康観察は、教職員と生徒の対話の機会を増やすきっかけになったと言える。

(2) 対話が増えることで、教職員が生徒を理解し相談しやすい関係づくりにつながったか。

図3の「絵文字を使った健康観察を活用しましたか」の質問で、肯定的な回答をした教職員に「どのように活用をしたか」について自由記述で回答を得た。その記述内容と教職員へのインタビュー内容を教職員同士の対話について(表11)・対話以外の活用について(表12)・生徒理解につながった内容(表13)を整理した。

## ア 教職員への事後調査から

表11 教職員同士の対話について

- ・毎朝、全校生徒の確認を行い、気になる絵文字と「話したいことがある」にチェックの付いている生徒には、担任や学年の教職員と連携した。
- ・体育祭の延期が決まった際に、「叫んでいるような絵文字」が増えたことに気づいた教職員の発信から、生徒の様子についての会話が職員室で始まった。
- ・担任は、朝の時間にGoogle フォームの回答を見るのではなく、子どもの様子を見てほしいので、担任以外が絵文字をチェックした。「泣いている絵文字」「目が回っている絵文字」「怒っているような絵文字」「話したいことがある」をチェックした生徒の情報を担任に伝え、担任からアプローチしてもらっていた。その後の生徒の様子を担任と共有した。
- ・「今日のAさんは、絵文字がいつもと違うから話を聞いてみて」と学年外の教職員から教えてもらった。
- ・他クラスの生徒の絵文字が気になり、担任に伝えることが良いか、自分から直接声をかけるのが良いか迷ったので、学年職員に相談をした。
- ・「マスクの絵文字」を選んだ生徒と話し、体調が少し良くないことが分かったので、学年の教職員と情報共有することができた。
- ・「話したいことがある」にチェックをした生徒への声掛けを「誰が・いつ・どのように」行うか等を関係職員と相談をした。

(原文の意味を変えない範囲で改編)

表12 対話以外の活用について

- ・学校での生徒の様子と絵文字がリンクしているかどうかを判断するために活用した。
- ・毎日同じ絵文字の生徒もいたが、異なる絵文字を選んだ場合、その原因が何かを考えた。
- ・学年の教職員が使う部屋に小さな黒板を置き、そこに健康観察に使っている掲示用の絵文字を貼り、生徒の様子を書き込むことで、多くの教職員の目で生徒を見られるようにした。

(原文の意味を変えない範囲で改編)

表13 生徒理解につながった内容

- ・継続して続けることで「こういう絵文字を選んでいる時には、この悩みだな」「この表情の時は、この絵文字だな」と生徒の理解につながった。
- ・絵文字の話をするようになってから、生徒から自分の話をしてくれるようになった。
- ・Bさんは、最近とても表情が明るくなった。絵文字をきっかけに話をする教職員がいるからかもしれない。
- ・いつも穏やかなCさんが「話したいことがある」にチェックが付いていたので、普段多く関わる教職員が声を掛けたところ、抱えている悩みを聴き、教職員間で情報共有し支援につなげることができた。
- ・あまり気持ちを出さない子も絵文字だと正直に表現するなと感じた。
- ・話していると、自分では考えられないことでも生徒は心が揺らぐのだなと分かり、今まで見えないものが見えてきた。
- ・生徒が入力したものをいろいろな教職員が見ると分かっているのに、生徒はいろいろな絵文字で気持ちを表現していた。
- ・他愛のない会話の積み重ねが、いざというときの相談しやすい関係づくりにつながっていると思った。

(原文の意味を変えない範囲で改編)

イ 生徒への事前・事後調査から

「困りごとや分からないこと、不安があるときに、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」の事前・事後の質問において、【あてはまる4点、どちらかと言えばあてはまる3点、どちらかと言えばあてはまらない2点、あてはまらない1点】点数を割り当て、事前・事後の平均値に統計的に有意な差があるかをExcelによる表計算ソフトにより、対応のないt検定を行った。集計・比較をしたものを表14及び図6に示す。

事前・事後の調査を比較すると、【あてはまる】の回答が10ポイント上がっていた。t検定では、事前・事後の平均値に統計的な有意な差(p<0.05)が見られたため、事後の増加について偶然の結果ではないことが表された。

表14 事前・事後調査の回答による相関

事前(N=460)	事後(N=409)	p値
平均値	平均値	
2.91	3.04	0.033

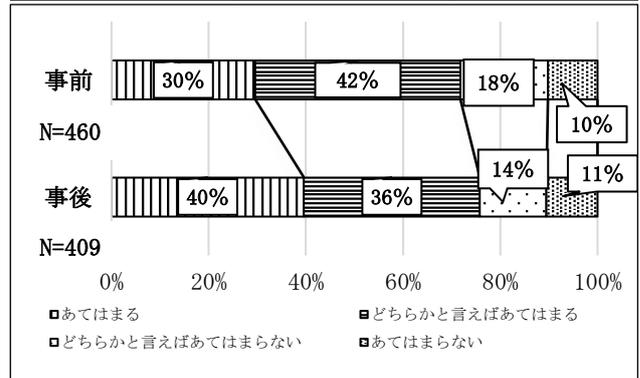


図6 困りごとや分からないこと、不安があるときに、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますかの事前・事後の比較

以上のことにより、教職員の事後調査では、1人1台端末を活用した絵文字による健康観察を手掛かりに生徒の様子を観察し、その情報を教職員同士で話題にしたり、いつもと違う様子に気づいた時に学年の教職員に相談をしたりしていた(表11)。また、表12の下線のように、担任だけでなく他の教職員と気になる生徒について、授業の合間や放課後の時間を活用しながら主体的に情報共有することが、生徒の理解につながったと推測される。さらに、教職員同士で対話を重ねる中で、教職員が不安や悩みを一人で抱えることなく、他の教職員と生徒に対する観察・声掛け等の相談や役割分担を行ったことが、教職員の安心感につながったと考える。その安心感は、教職員の心の余裕を生み、生徒に対して受容や共感的な姿勢で対話を重ねたことで、生徒の安心や信頼にもつながったと考察する。

図6の生徒の事前・事後調査では、否定的な回答に大きな変化がなかった。それは、相談できる関係になるまでにかかる時間には個人差があるため、今回の検証実践の期間では、変化が見られなかったと考えた。しかし、【どちらかと言えばあてはまらない】が4ポイント減ったことを考えると、継続していくことで、少しずつ肯定的に変化していくことが期待できる。また、肯定的な回答の【あてはまる】のポイントに有意差が見られたのは、事前調査から4ヶ月経っていることにより、他の要因と相まってポイントが上がったことも考えられるが、表13の下線のように生徒の変容からも、今回の取組による生徒への積極的な声掛けから、

「気にかけているよ」等の教職員の気持ちが伝わり、生徒の安心や信頼につながり、生徒の「先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」という質問の肯定的な回答につながったと推測される。

このことから、教職員と生徒や教職員同士で対話を重ねることが、生徒を理解し相談しやすい関係づくりにつながったと言える。

## 研究のまとめ

### 1 研究の成果

本研究では、生徒が相談しやすい関係づくりに向け、教職員からの対話を増やすきっかけとして、1人1台端末を活用した絵文字による健康観察を毎日行った。生徒がICTを使って絵文字を選ぶことにより、生徒は自分の気持ちを発信しやすくなり、教職員は生徒の気持ちを可視化することができた。教職員は、人によって解釈の異なる曖昧な絵文字からその意味を考えると、「どうしてその絵文字を選んだのか」「何かあったのか」などの疑問を感じたり、いつもと違う絵文字を選んだ生徒や実際の様子と絵文字が異なる生徒の変化に気付いたりした。教職員には、事前に「絵文字を使った健康観察は、対話をするきっかけになる」という研究の視点は示していなかったにも関わらず、この絵文字の曖昧さが生徒の気持ちを理解したいという思いとなり、教職員の主体的な対話につながったと考える。

教職員と生徒が対話を重ねる中で、生徒が日々感じている思いや心の揺らぎなどを自分の言葉で表現することにより、自分の気持ちが整理され自己理解が進むとともに、教職員も生徒の気持ちや考えを理解しやすくなり、教職員一人ひとりの生徒理解が進んだ。また、教職員同士の対話から生徒の多面的な情報が共有され、更なる生徒理解に向けて教職員は生徒との積極的な対話に取り組んだ。その教職員からの日々の声掛けにより、「気にかけているよ」「あなたのことを知りたい」という教職員の気持ちが生徒に伝わり、教職員に対する生徒の安心や信頼につながったと考える。教職員への事後調査では、絵文字による健康観察をきっかけに生徒と対話することにより、「生徒から自分の話をしてくれるようになった」「生徒の表情が明るくなった」「他愛のない会話の積み重ねが、いざというときの相談しやすい関係づくりにつながっている」と感じている教職員がいた。このことにより、教職員自身も教職員からの積極的な対話が生徒との関係づくりに効果があると認識し始めている。

よって、1人1台端末を活用した絵文字による健康

観察は、教職員と生徒の対話を増やすきっかけや教職員同士の生徒理解に向けた対話の手掛かりとなり、その積み重ねは生徒が相談しやすい関係づくりに向けて一定の成果を出すことができた。

本研究の目的に加え、教職員の安心感と生徒の安心感の間に相関関係が示唆された。具体的には、教職員同士が生徒を中心とした対話を重ねたことで、不安や悩みを一人で抱えることなく相談や連携を行うことができた。それが教職員の安心感につながり、その安心感が生徒と対話をする際の受容的な雰囲気として生徒に伝わることで、教職員に対する生徒の安心感にもつながっていると考える。

### 2 今後の課題と展望

#### (1) 1人1台端末の活用について

生徒が朝の時間に端末を起動させ入力する時間や、教職員が健康観察の回答を確認する時間についての課題があったため、時間の確保についての調整が必要である。

#### (2) 絵文字について

生徒によっては、絵文字の曖昧さや数の多さが戸惑いや迷いを生むことがあったため、生徒の特性や発達段階に合わせ、絵文字に加えて言葉や数値で自分の気持ちを表現できるように工夫することも必要である。また、対話を活性化させるためには、定期的に絵文字を変更する工夫があってもよいと考える。

#### (3) 今後の展望

今回の研究では、朝の健康観察の時間を利用して、対話につながる手立てを実施した。しかし、健康観察は1日を通して行うものであるため、他の教科の時間においても生徒の心身の様子を把握する手段としての活用や発達段階に応じた活用ができるように改善していきたい。

普段の生徒の様子から、心配することがないと感じたため、絵文字を使った健康観察を活用しなかったと回答した教職員がいた。しかし、感情を出せない・出さない生徒がいることを教職員が理解をし、表面化していない生徒の不安や悩みに気付くために、このようなICTを活用した健康観察等を利用し、生徒の小さな変化に気付けるようにしていきたい。

## おわりに

本研究を進めるにあたり、御協力をいただいた横須賀市立久里浜中学校の学校長を始め、教職員、生徒の皆様、本研究に関わっていただきました全ての皆様に深く感謝を申し上げ、結びとする。

### [指導担当者]

平山 有希子<sup>1</sup> 飯沼 智哉<sup>2</sup> 柴山 洋子<sup>3</sup>

- 1 指導主事
- 2 主査(兼)指導主事
- 3 教育指導員

## 引用文献

- 神奈川県教育委員会 2023 「子どもサポートハンドブック～すべての子どもたちの笑顔のために～」  
<https://www.pref.kanagawa.jp/documents/10861/r5handbook.pdf> (2026年1月8日取得)
- 神奈川県立総合教育センター 2013 「生徒の自己理解を促す 共感的な対話」 p. 32  
<https://edu-ctr.pen-kanagawa.ed.jp/snavi/soudanSnavi/documents/jikorikai24.pdf> (2026年1月8日取得)
- 神奈川県立総合教育センター 2020 「支援を必要とする児童・生徒の教育のために」 p. 17  
[https://www.pen-kanagawa.ed.jp/edu-ctr/kenkyu/documents/202103\\_shienwohituyoutosuru.pdf](https://www.pen-kanagawa.ed.jp/edu-ctr/kenkyu/documents/202103_shienwohituyoutosuru.pdf) (2026年1月8日取得)
- 神奈川県立総合教育センター 2023 「教育相談コーディネーターハンドブック」 p. 28  
<https://www.pen-kanagawa.ed.jp/edu-ctr/gakkoshien/documents/cohandbook.pdf> (2026年1月8日取得)
- 国立教育政策研究所 2024 「令和6年度 全国学力・学習状況調査 生徒質問調査 回答結果集計 都道府県別 神奈川県」  
[https://warp.ndl.go.jp/20250811/20250803152858/https://www.nier.go.jp/24chousakekkahoukoku/factsheet/14\\_kanagawa/14m\\_24a.xlsx](https://warp.ndl.go.jp/20250811/20250803152858/https://www.nier.go.jp/24chousakekkahoukoku/factsheet/14_kanagawa/14m_24a.xlsx) (2026年1月19日取得)
- 中央教育審議会 2008 「子どもの心身の健康を守り、安全・安心を確保するために学校全体としての取組を進めるための方策について(答申)」 p. 11  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2009/01/14/001\\_4.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/01/14/001_4.pdf) (2026年1月8日取得)
- 文部科学省 2022 『生徒指導提要』 東洋館出版社 pp. 82-83
- 文部科学省 2023 「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策 COCOLOプラン」  
[https://www.mext.go.jp/content/20230418-mxt\\_jidou02-000028870-cc.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230418-mxt_jidou02-000028870-cc.pdf) (2026年1月8日取得)
- 五十嵐磨由子 2025 「心の問題を早期発見し対応につなげる手立ての研究ータブレット端末を利用した心の健康観察とチーム支援体制構築を通してー」(上越教育大学『教育実践研究』第35集) p. 228
- 稲葉利江子・高崎俊之・森由美子 2006 「絵文字コミュニケーションにおける類型の比較」(第5回情報科学技術フォーラム) p. 480
- 岩田美穂 2023 「タブレット端末を活用した朝の健康状態の把握方法の検証ーコロナ禍に子どもの健康状態を簡潔かつ速やかに把握し、感染拡大を予

防するためにー」(上越教育大学『教育実践研究』第33集) p. 246

- HERBERT H. CLARK and DEANNA WILKES-GIBBS 1986  
「Referring as a collaborative process」  
(Stanford University 『Cognition, 22(1986)』 1-39) p. 9

## 参考資料

- 文部科学省 2009 「教職員のための子どもの健康観察の方法と問題への対応」  
[https://www.mext.go.jp/content/20240322-mxt\\_kenshoku-000031772\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20240322-mxt_kenshoku-000031772_1.pdf) (2026年1月8日取得)
- 文部科学省 2024 「1人1台端末等を活用した『心の健康観察』について」(こども家庭庁「第7回こどもの自殺対策に関する関係省庁連絡会議」資料2 文部科学省提出資料)  
[https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic\\_page/field\\_ref\\_resources/19f3feb3-912a-4741-9bd9-7f523d28e971/fa6986a5/20251121\\_councilsA\\_kodomonojisatsutaisaku-kaigi-19f3feb3\\_14.pdf](https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/19f3feb3-912a-4741-9bd9-7f523d28e971/fa6986a5/20251121_councilsA_kodomonojisatsutaisaku-kaigi-19f3feb3_14.pdf) (2026年2月6日)